

延岡市長 首藤 正治 様

平成24年度

政策提言書

1. 災害（津波）に強いまちづくり
2. 高速道路開通を見据えた観光施策の充実

平成25年3月28日

延岡市議会

議長 佐藤 勉

1. 「災害（津波）に強いまちづくり」について

市当局の防災に対する取り組みにつきましては、平素より、担当部署を中心に各種施策の推進をはじめ、各地域における防災活動への支援など、幅広い実効ある取り組みをしていただき、深く敬意を表します。

早いもので、今年の3月で東日本大震災から2年が経ちました。しかし、テレビで報道されたあの時の悲惨な映像は、衝撃的で、鮮烈な記憶として今でも残っています。そして、国民の誰もが、自然災害の驚異、防災の必要性を痛感したところであります。

また、昨年8月には、国から南海トラフの巨大地震に伴う各地の津波高や浸水区域、被害想定等が示され、新聞、テレビで大々的に報道されました。

それを受けて、本県でも県内各市町村の詳細な調査が行われ、その結果が本年2月13日に公表されたところです。これにより、市民の防災に対する関心、特に地震・津波対策への関心は更に高まったのではないかと思います。

この県の発表は、最大級の津波が起こった場合の浸水想定であり、台風やゲリラ豪雨のような頻度で起こるものではないことは承知しています。

しかし、その最大級の津波が、いつ起こるか分からず、起きた時の被害は台風やゲリラ豪雨の比ではありません。

そのため、災害の中でも特に津波に対する防災、減災について、「備えあれば憂いなし」を実践し、これまで以上の万全の対策を講じておく必要があると考えております。

いつ起こるかわからない津波に対する被害を最小限にとどめるためには、まず、市民一人ひとりが、危機管理意識を常日頃から持つておく必要があります。

そこで、どこに居ても分かる、土地勘の無い人でも分かる避難案内板の設置や、時機をとらえての意識啓発のためのパンフレットの作成・配布などの具体的な方策をとりながら、危機管理意識の向上を図っていくべきであると思います。

また、本市は、県内の他市町村に先駆けて津波避難場所の選定を進めてきたところですが、先般の県の南海トラフ巨大地震に伴う津波浸水想定を踏まえて、これまでの避難場所の安全性の検証と、避難場所の未選定地区への早急な対応を行うとともに、避難路整備等を更に進めるべきであると考えます。

そうした防災対策を、広範囲に渡り、迅速に行うためには、現在の担当部署である危機管理室を一時的に増員し、終われば元に戻すといった柔軟な人員配置を行うべきであります。

それは、災害時においても同様で、災害対策本部組織の要となる危機管理室への人員増を行い、必要な情報の収集・分析、広報業務の充実をはじめ総合的な調整機能を強化して災害対応にあたるべきであると考えます。

また、女性の視点からの防災対策の推進ということで、危機管理室への女性管理監督職員の配置を行っていただきたいと思えます。

このような点を踏まえつつ、市民の声や実情に十分配慮しながら、真に必要なとしている防災対策が迅速かつ確実に推進され、災害、特に津波に対する災害に強いまちづくりが実現できるよう、下記の事項について特段の措置を講じられるよう強く提言いたします。

記

(1) 危機管理意識向上を図るための施策を推進すること

- ①どこでもわかる、誰でもわかる避難案内板の設置
- ②避難マップと危機管理啓発パンフレットの作成・各世帯配布

(2) 早急な避難場所の選定と避難路・避難場所の整備を推進すること

- ①避難場所未選定地区への早急な対応
- ②協働共汗避難路整備事業の継続実施

(3) 危機管理体制の更なる充実を図ること

- ①防災対策及び災害時における柔軟な人員配置
- ②危機管理室への女性管理監督職員の配置

2. 「高速道路開通を見据えた観光施策の充実」について

本市を取り巻く高速交通網の整備は、近年、工事が前倒しで進められており、特に東九州自動車道は、昨年12月15日には「須美江～北川～延岡間」、12月22日には「高鍋～都農間」、そして今年の2月16日には宮崎県と大分県をつなぐ「北浦～蒲江間」が供用開始されました。

平成25年度中には「日向～都農間」が開通の予定であり、それによって、本市から宮崎市まで高速道路でつながることになります。これから地域の活性化とともに地域間の交流、そして競争が活発化することになります。

そうしたなか、道の駅「北川はゆま」は、高速道路のサービスエリアとして、利用客の増加が見込まれるとともに、本市の北の玄関口として、その果たすべき役割は大変大きなものがあります。

しかしながら、「北川はゆま」の現状を見ると、94台分の駐車場が確保されておりますが、九州管内の他の高速道のサービスエリアと比較すると、駐車可能台数がかなり少ないと思います。

北川はゆまの隣のパーキングエリアは、北が大分県の松岡パーキングエリアになりますが、約84km離れておりますし、南は川南パーキングエリアまで約72km離れています。

北川はゆまを利用しなければ、150km以上の間、トイレ休憩などができないことから、高速道路の利用者が「北川はゆま」に立ち寄る割合は非常に高いものと思われますし、あと2、3年後に全線が開通すれば、更に利用客は増えるものと考えております。

一度来て、駐車場が無かったり、施設が使いにくかったり、十分な食事や買い物ができなかつたりすれば、その印象が後を引き、リピーターが来なくなるのではないかと懸念するところです。

また、本格的な高速交通時代の到来を迎え、本市がこれから更に活性化し、持続的に発展していくためには、どれだけ観光客を市内に、そして市の中心部に呼び込めるかが大きな鍵を握っていると考えております。

そのためには、観光客が集まる環境づくりと施設の整備が必要であり、その核となるのが、本市の歴史的シンボルである城山を中心とした歴史・文化ゾーンの整備であると考えております。それがひいては、市民の憩いの場ともなり、市街地の賑わいの再生につながるものと思います。

具体的には、城山を中心とした歴史・文化ゾーンの長期的な整備計画を早急に策定し、それに基づいて、城山の生い茂る樹木の適正な剪定や間伐、石垣の整備などの景観づくりに努め、そこに延岡城跡があることを大いにPRすべきであります。そして、内藤記念館の再整備をはじめとして、観光客が訪れ、市民が集う施設整備の推進を図るべきです。

また、平成9年度から、城山一帯については、国指定史跡を目指す取り組みが続けられておりますが、15年を経た今も国への申請の目途は立っておりません。この際、国指定を目指す取り組みを中止し、史実という枠にとらわれることなく、賑わいの再生を目指し、実効性の高い城山周辺の整備推進を図っていくことが必要であると考えております。

これから東九州自動車道が全線開通するまでの2、3年が勝負の時であります。高速道路の役割を十分に活用しながら、本市が他市町村との地域間競争に打ち勝ち、東九州の中核都市として持続的に発展していくことができるよう、下記の事項について特段の措置を講じられるよう強く提言いたします。

記

(1) 道の駅「北川はゆま」の更なる充実を図ること

- ①駐車場の整備拡充
- ②機能的な施設の整備充実

(2) 城山を中心とした市民が憩い、観光客が集う環境づくりと施設整備を推進すること

- ①歴史・文化ゾーンとしての城山の景観づくり
- ②国指定史跡を目指す取り組みの中止